

I. 高校・浪人時代

- ・1975年、長田高校卒業。暗中模索の高校生活。
- ・北海道一周の貧乏旅行。

II. 大学・大学院時代

- ・「恵迪寮」。
- ・セツルメント・サークル。
- ・「人々の生活・感情・文化が見える社会科学＝社会学」へ。
- ・大学受験までの「勉強」と大学・大学院での「研究」の違い。

III. 研究テーマ：人はいかにして世界と歴史を創るか、ポスト・コロニアリズム

一人一人の人間が、どのように新たな時代を切り拓きつつあるのか。

個々人のミクロな生活や意識の変化 & マクロな世界社会の歴史的転換の双方を貫く内在論理の解明。

「一人の人間の生活と、一つの社会の歴史とは、両者をもとに理解することなしには、そのどちらの一つをも理解することができない」(C. W. ミルズ『社会学的想像力』)

人間：社会の歴史的な変遷に規定・翻弄。

BUT 社会の歴史的な変動・変革←一人一人の人間の生活・意識の変化。

一人一人の生活・意識：当事者から聞く。1000人以上にインタビュー調査。

マクロな社会の歴史的変動・転換：多様な学説・意見。

ポスト・コロニアリズム。

20世紀半ば、帝国主義・植民地主義→民族解放・国民主権。

BUT 未解決の問題 & 新たにうみだされてきた深刻な諸問題。

貧困・飢餓、政治的独裁、格差・差別、生きづらさ。

地球規模の環境破壊、核汚染の拡散、移民・難民の苦難、

自国中心主義・排外主義・民族紛争、無差別テロ。「いじめ」、過労死。

国民主権：「非国民」を主権から排除。排外的な権利・システム。

多様性をもつ人々を「国民」という同質性に束縛・管理。

国民主権・民族解放を乗り越えた新たな社会とは？

IV. 異国の父母ー中国残留日本人孤児を育てた養父母たちー

【中国残留日本人孤児・養父母とは？】

中国残留日本人孤児（以下、残留孤児）：1945年（日本敗戦）、中国の東北地方に取り残され、中国人養父母に引き取られて育った日本人の子供達。

養父母：日本人の残留孤児の命を救い、育て上げた中国人。人数は不明。BUT 1万人以上。

2002～2004年、中国東北地方、養父母にインタビュー調査。

高齢、ほとんどが死去・寝たきり。居住地も不明。

養父母の搜索。自動車も入れない農村、馬車・徒歩。治安の悪さ。

BUT 親切的な現地の人々の協力、情報・移動手手段の提供、もてなし。

14名の養父母（養母12人、養父2人）にインタビュー。

1910～1927年生まれ（調査時点、平均82.6歳）。

中国東北地方（吉林省・遼寧省等）、貧しい農家に出生、不就学・非識字。

行商人（食品・手作り石鹸等）、労働者（ごみ回収、毛皮なめし、縫製、縄ない、靴製造等）、農民。

貧しい生活。調査時点は高齢・無職。

【第1期：帝国主義・民族解放の時代】

1932年、日本：中国東北地方に傀儡国家「満州国」を建国、多くの日本人を国策移民として送出。

1945年8月、ソ連：宣戦布告、「満州国」に進攻。

日本軍：先に逃亡・撤退。

現地の日本の民間人：難民化。数カ月間に及ぶ逃避行・流浪。多数が死去。

敗戦後、日本政府：日本人難民の「現地土着方針」。

日本人難民：零下30度以下の現地で越冬、餓死・病死・凍死。

逃避行・数年間にも及ぶ難民生活：親子の離別・死別、多数の日本人孤児が発生。

中国人養父母：「満州国」時代、日本の侵略・支配で多様な被害。

飢餓。「日本があと1～2年、戦争に負けなければ、私たちは皆、餓死していただろう」。

麻袋をまとめて零下30度の極寒をしのぐ。

日本人の警察官に蹴り倒されて流産、二度と妊娠できず。

勞工として強制労働。

1945～1946年頃、養父母：日本人孤児を養子として引き取る。

路上に放置され、死にかかっている子供を引き取り。

子供連れでの逃避行が不可能、日本人の親から「何とか子供の命だけは助けてくれ」と委託。

当時、養父母：平均25.9歳、残留孤児：平均2.2歳。

養父母はなぜ、「敵国・日本」の子供を助けたのか？

中国東北地方にいた一般の日本人を一切非難せず。

「私は日本人にあれこれ言うつもりはないよ。当時、日本人が侵略してきたのも、日本政府・国が派遣したからでしょ。一人一人の日本人が悪いわけではないよ」。

一般の日本人に同情。

「一般の日本人には何の権力もなく、私達と同じ」、

「上の方が言えば、下はそれに従わなければならないのは、日本でも中国でも同じ」。

「日本の敗戦後、殺されたり、難民になった日本人は偉い人ではなく、普通の農民や女性・子供ばかり」。

＝国籍の違い（中国人・日本人）より、階級の違い（権力者・民衆）の方を重視。

孤児を引き取った動機：多様。

BUT 最多：「とにかく子供が可哀想で命を助けるしかない。今、ここで見捨てたら、この子は死んでしまう」

日本人の実父母が我が子を手放したことについて：「当時の状況をふまえれば、やむをえなかった」。

「子供を置いて逃げた日本人の親を非難するつもりはないよ。日本人の親も、手放したくて手放したのではないからね。当時は、そうしなければ子供が生きられなかったから仕方がなかった。日本人は優しいからこそ、子供を手放したんだよ」、

「子供を捨てて逃げた日本人のことを、冷酷だとは思わない。逆に、一番賢明だったと思う。捨てなければ、まちがいなく皆、死んでいた。捨てたからこそ、子供は生きられたんだ」。

＝国籍・民族の壁を超え、同じ親・人間としての感性。

養子が日本人の子であること：養父母はほとんどこだわらず。

「子供に罪はないし、育てなければ死んでしまうんだから。日本人とか何人とか考えず、ただ私の娘だと思って育てただけだ。私は母親だから」

「捨てるのは簡単だよ。でも、やはり命は助けなければ…。まあ、どの国の子とか考えずに、救命という感じだね」

「どこの国の子供でも、私たちが引き取って育てれば私たちの娘だ」。

残留孤児 & 養父母 & 養父母の実子（＝残留孤児の義兄弟姉妹）：総じて良好な家族関係を構築。

【第2期：東西冷戦の時代】

戦後の中国での残留孤児と養父母の生活：苛酷。

1945年以降、東西冷戦（資本主義 VS 社会主義）が本格化。

中国：1946年以降、中国：国民党（資本主義） VS 共産党（社会主義）の内戦が激化。

1949年、共産党が勝利、社会主義の中華人民共和国が成立。

日本：アメリカの単独占領、「極東における反共産主義の防壁」。

中華人民共和国を承認せず、敵視する親米・親台湾（中華民国）の政権が成立。

1958年、日本政府：中国敵視政策の一環として、中国に取り残された日本人の引揚事業を打ち切り。

中国に取り残された日本人：日本に帰国不能に。

中華人民共和国：東西冷戦下、政治的混乱。

1959～1961年、大飢饉。2000万人～4500万人が餓死。

1966～1976年、「文化大革命」、政治的大混乱。1000万人ともいわれる政治的犠牲者。

養父母による残留孤児の養育：極めて困難。

BUT 養父母：養子・実子に別けへだてなく愛情を注いで養育。

内戦で餓死寸前、養子を抱いて食糧がある農村への関門を命がけで突破。

養子の病気治療で莫大な借金、

養子を大学にまで進学させるため、苛酷な肉体労働で身体を壊しながら学費調達。

養子が「小日本鬼子」といじめられる度に転居。
文化大革命時代、残留孤児だけでなく、養父母も「日本のスパイを育てた」という嫌疑で迫害。
街での引き回し、収監、16年間も貧しい農村に追放。暴行を受けて半身不随に。
BUT 「この子は日本人ではない。自分が生んだ実子だ」と真相を隠し、養子の「生命＝生活」を守り抜く。

【第3期 グローバリゼーションの時代】

1972年、日中国交正常化。

→残留孤児：日本の肉親（両親・兄弟）捜し、数十年ぶりの「涙の再会」。日本への永住帰国を希望。

BUT 日本政府：残留孤児の日本への帰国を容易に認めず。

∴ 1972年、中国にいる残留孤児の国籍を一方的・一律に日本から中国に変更。

中国への残留：本人の自己責任 or 家族の「私事」。

∴ 帰国・来日後の生活：残留孤児の自己責任 or 家族・肉親の扶養義務。

残留孤児の日本への帰国：大幅に遅延。

残留孤児：「自分たちは自己責任で中国に残ったのではなく、日本政府が起こした戦争や引揚事業の打ち切りによって取り残された。また日本国籍を自分の意思で放棄した事実はない」。

日本政府の政策を批判。

日本の肉親・世論：日本政府の政策を批判。

日本政府：政策を徐々に変更。

1995年頃（日中国交正常化から23年後）、日本への帰国制限政策を廃止。

→多数の残留孤児：配偶者・子供を連れて日本に永住帰国。

日本国内：「これで、残留孤児問題もようやく解決」との雰囲気・世論。

BUT 残留孤児の永住帰国：残留孤児・養父母の双方にとってつらい離別。

残留孤児：「第二の命をくれた」大恩ある養父母との別れ。

養父母：育ててきた子供一家との離別。

日中間：往来は極めて困難。

中国社会：「養児防老」（老後は子供が親の生活を扶養）。

養父母：当初、残留孤児の永住帰国に反対・抵抗。「日本に行かないで」と懇願、絶望で気を失う。

BUT 残留孤児の苦悩を察して理解、葛藤を乗り越え、肉親捜し・永住帰国に協力。

公安局に出向き、孤児を引き取った時の状況証拠を詳しく証言。「子供の日本の肉親を必ず捜し出してやってください。私が死んだら証人がいなくなるから、とにかく早く探してやって」

「身を切られるようだ。どうしたらいいのかわからない」。

養父母はなぜ、残留孤児の永住帰国に協力したのか？

養子が「日本人の血を引く日本民族」だったからではない。（「日本人か中国人かなどどうでもよい」）

1) 1980年代末まで東西冷戦。残留孤児：中国で差別・迫害。

文化大革命、養父母とともに死ぬほどの迫害も。

「また、いつ日中の国どうしの関係が悪化して、残留孤児やその子供達が迫害・弾圧されるかわからない。

そうになったら今度こそ生き残れないかもしれない」

「日本に行けば、養子は日本人だから差別・迫害されることもないだろう」。

2) 1990年代以降、グローバリゼーション・「改革開放（市場経済化）」。

地域・階層間の経済格差。大多数の中国民衆：貧困。

中国東北地方：かつて重工業の国有企業の一大集積地。

改革開放・市場経済化→国有企業の倒産・閉鎖、猛烈なリストラ。

「中国の都市貧民の四分の一は東北にいる」。

教育・医療も市場経済化。莫大なお金が必要。

「養子（残留孤児）や孫も、日本に行けばひどい生活困窮から抜け出せるだろう」、

「日本政府は、戦争被害者・日本国民である養子（残留孤児）の生活を支援してくれるに違いない」

養子との別離の苦悩、その後の長い孤独に耐えようと決意。

残留孤児の日本への帰国：日本国内では、肉親とのつながり・「日本人の血統」・「涙の再会」・「祖国への帰還」とみなされがち。

BUT 背景には、東西冷戦時代の社会分裂・対立、南北格差、グローバリゼーションに伴う経済格差・貧困の拡大等、地球規模の社会構造の矛盾。

養父母：日本敗戦直後、「わが子の命さえ助かれれば…」と引き裂かれるような気持ちで子供を手放した日本人の実父母に深く同情。

こうした実父母と同様、わが子の「生命－生活」を助けるため、別離の苦痛を受け入れ。

「もちろん手放したくなかったし、つらかった。でも、そこに子供がいたら、またきっと帰ってくる」。

【その後の養父母と残留孤児】

養父母の苦渋の決断：報われず。

日本政府：残留孤児問題＝本人の自己責任、家族の「私事」。帰国制限政策、帰国後の生活も自己責任。

∴ 残留孤児の帰国：大幅に遅延（帰国時、40～60歳代）、

日本語もできず、不安定な非正規雇用・単純労働。

日本での年金加入期間不足、退職後は生活保護（最底辺の貧困生活）。

中国の養父母の訪問・送金は不可能。

生活保護受給：海外旅行禁止。養父母に会うために訪中すると生活保護支給停止。

「日本語ができない中国人」として差別。（中国では日本人、日本に帰国すると中国人として差別）。

養父母：中国で貧困・孤独な生活。

無年金。調査時の世帯収入：平均480元（約6500円）、「生活がとても苦しい」「乞食より少しまし」

高齢・病気。医療費が高くて通院も不可。

暖房費払えず、零下30度以下の部屋で凍傷に。

実子がいても、失業率は7割以上。

農村の生活：一層苛酷。収穫のいい年で年収2000元（約2万6600円。農業の必要経費を含む）、不作の年は赤字で借金。無医村、雨が降ると道がなくなり、村から出られず。

養父母・残留孤児の交流：ほとんどなし。

孤児の訪中：（前述）生活保護制度で禁止。

養父母：「養子が中国にいる間も生活保護を止めないでほしい」、

「もう先の長くない親に会うために中国に帰ったら、生活保護を止めるというのは非情」、

「生きている間に、たった一度だけでも養子・残留孤児に再会したい」。

電話：「お金がかかる」、「耳が聞こえにくい」、「電話代が払えず、電話が止められている」。

手紙：「字が読み書きできない」。

養父母：日本にいる養子に現状以上の何かを期待することはできない。

「養子一家の日本での生活が安定すれば、それだけでいい。それ以上は何も望まない」、

「今、日本にいる娘（残留孤児）との関係は断ち切れている。それでも私はあの子を育ててよかったと思っているよ。娘は（中国にいるときは）仕事も見つかったし、結婚もしたし、子供もできた。それに何より娘は今、日本で生きている」。

残留孤児：2002年以降、日本で国家賠償訴訟。

残留孤児の苦難：本人の自己責任ではない。（「2歳で中国に置き去りにされた私に、どんな責任?!」）

本政府の戦争、引揚事業の打ち切り、日本国籍の一方的剥奪、帰国制限政策等に起因。

政府は残留孤児に謝罪・賠償すべき。

日本のマスメディア・世論：残留孤児の主張を概ね支持。

日本政府：訴訟取り下げを条件に、一定の生活支援政策を実施。政治決着。

→残留孤児の日本での生活：困難・問題が山積み。BUT 一定の改善。

中国訪問の規制：若干、緩和。

BUT すでに養父母：中国の地で死去。

【総括】

「養父母になる／養父母である」こと：単なる美談ではない。

養父母の人生：帝国主義、東西冷戦、グローバリゼーションという国境を越えた現代史の亀裂につねに立たされ、虐げられて続けてきた。

& 国家・国籍の壁 & 貧富の格差。ポスト・コロニアル世界の二重の境界線による分断・苦難を一身に引き受け。

BUT ただ歴史・社会に翻弄されてきただけではない。

「養父母になる／養父母である」には、ある種の主体性・「能力」が必要。

国家・国籍の壁、血統、個人的打算よりも、「生命＝生活(life)」の維持と世代的再生産を大切に。

＝当たり前人間としての「能力」。BUT 誰にでも発揮できるわけではない「能力」。

養父母の「能力」≠「よき主権者・国民」、「中華民族に固有の寛大さ」、

他人との競争に勝ち残り、または競争からの離脱を自ら選択する個性的な能力。

市民的なボランティア・共同の能力。

自分の個性や主張を豊かに表現する能力。

「養父母になる／養父母である」能力＝人間としての普遍主義、

どんなときも人間の「生命＝生活(life)」を最も重視し、帝国主義、東西冷戦、グローバリゼーションといった世界社会の矛盾に抵抗し続ける、静かな批判的普遍主義。